

おしましまへす

タクシーを運転して八年

今回は新潟市のタクシー会社に勤め、タクシーのハンドルを握って八年という米山さんにいろいろ話を伺いました。

「この道に入った動機は...」
「もともと車に乗って外を飛び回るのが好きだったんです。それでタクシーの運転手が楽そうではないなあと、第二種免許をとったのがきっかけです」

女性運転手の数は...
「私の会社では二人、新潟市内では四十人ちょっとはいるようです。豊栄市内では多分わたし一人じゃないでしょうか」

お客さんの反応は...
「乗った途端ちよつとビックリする人が多いですね。中には、今日は朝から縁起がいいなあ、なんていう人もいます」



米山知恵子さん (長場 34歳)

あつちこつちに自分なりの場所を決めてあるんです」
運転歴八年の感想は...
「側で見るのと実際に運転するのは大違いです。男性ほどではありませんが、やはりノルマがあったり、水揚げという成績が要求されます。ですから、体の方より精神的な疲労が大きいですね。家族の理解と協力がないと勤まりません」

心がけていることは...
「一人の運転手の善しあしが会社全体の評判になるので、お客さんには悪い印象を与えないよう気を使います。それと、万が一に備えて走っている時は必ずシートベルトを着けています。簡単ですが無事故、無違反という模範運転手の米山さん。長年の経験と持ち前の健康な体を生かしこれからも頑張りたい、と明るい笑顔で語ってくれました」

無事故、無違反という模範運転手の米山さん。長年の経験と持ち前の健康な体を生かしこれからも頑張りたい、と明るい笑顔で語ってくれました。

工場数、出荷額は三年連続マイナス

59年工業統計調査結果(概要)

昭和五十九年の市の工業統計調査の結果によると、電子関連の工場進出等に伴って従業者数は前年より若干増えたものの、工場数と製造品出荷額は三年連続のマイ

ナスになりました。
この結果を見ると、工場数は前年より五つ減って百二十六、従業者数は五十二人増えて千七百八十七人、また、製造品出荷額は約七

億六千万円減って約百七十四億二千万円となっています。このうち従業者が百人以上の工場はわずか三つ、出荷額が十億円以上の工場も四つだけです。
県内の集計はまだ出そろっていませんが、二十市の中では従業者数、出荷額共前年度と同様、両津市の上の十九位になりそうです。

一列になって 葛塚東小へ登校



雨にも負けず、風にも負けず

ペダルを踏んで三十分

内沼沖、新鼻甲二、新鼻乙の小学生は、葛塚東小学校までの距離が遠いため、市内で唯一の自転車での登校が許可されています。
学校までの道のりは約四キロメートル、自転車でも三十分は充分かかります。

朝七時三十分、内沼沖の神社の境内に二十一人全員が集合してから出発です。前と後を高学年、真ん中に低学年をはさみ縦一列に並んでの登校です。
今年も、新しく四人の一年生が自転車登校の仲間入りをしました。上級生に遅れないよう汗を流しながら一生懸命ペダルを踏んで頑張っています。

市では、登下校の際、交通事故に遭わないようにとこの通学道路沿線の電柱に「通学路、児童に注意」という看板を設置し運転者に注意を呼びかける予定です。

第三回

長浦 岡方親善将棋大会

- 四月十四日、大王荘、参加者四十人、団体戦の成績は省略
- Aブロック個人戦 一位 魚野源一 (浦木)
- Bブロック個人戦 一位 曾我 豊 (平林)
- Cブロック個人戦 一位 本田与三郎 (長場)



(28)

電灯のない時代の 電車計画

明治四十年の葛塚町町会議決書綴の中に、次のような大意の諮問案があり、町会は一月十五日に同意していた。町長は市島次太郎である。

「竹内綱他十四名から電気鉄道を布設するため、条例によって里道使用の出願があったが、この事業は有益なものと考えられるので使用を許可したい。」

軌道布設区間は、木崎村から葛塚町までであった。葛塚地区の起点・終点を地番で調べてみると、横井寄りの正尺の村外れから現在の市役所前までである。明治四十年に、鉄道の布設計画があったのには驚いた。しかも電車である。当時の葛塚町に

ありがとう ございました

○ 永宝会カラオケ愛好会(会長 永松芳郎)が、一万五千百十一円を福祉基金へ寄付。

俳句

豊栄俳句会
母の背の記憶も知らず墓地うらら 本田十一郎
遠足の一人おくれればんげつむ 小川クニイ
遠足の保母は園児を眼でつなぐ 細野 良蔵
若芝にはだしの子等とたわむれて 山崎 智盛
風紋にふとひざまずき海麗ら 高橋 紅夢

短歌

一日が貴重であった夕の鐘 水田蛙太郎
豊栄短歌会
つわぶきの花咲く塔に還らざる人の名呼べり幾度も呼べり(摩文 仁の丘) 長田 英
幼な日を語るごとくに並びをり嫁ぎし吾娘の残せし人形 田辺 タカ

市民文芸

川柳

「自由吟」 豊柳会
おふくろの味も豊かに落しぶた 井上睦子選
会いに行く春は一と色若く着る 師橋 山雨
溜飲を下げた一矢で縁が切れ 吉間 港月
片隅に保つ余生よ花曇り 中川 草舎

常臥の母の寝息も耳に慣れわれも いねむか二時を打つ聞く 飯田 千歳
幾千里翔びゆく遥かわたつみを無事に帰れと祈り見送る 高橋 君枝
古びたるノートに残る思い出よ涙せし日も今はなつかし 関川 マサ

は、まだ電灯もついていない。この計画の詳細については、知る手だてがなかった。
その後、別の目的で古い東北日報(新潟市で発行された新聞)を調査していると、「沼垂赤谷間電鉄計画」という見出しにぶつかった。明治三十九年十二月一日の記事である。先日の諮問案を思い出

利用して資本金百万円の会社を組織して、赤谷に千八百馬力の水力発電所を設け、沼垂から新発田を経て赤谷まで県道沿いに電車を走らせ、旅客と貨物運び、併わせて軌道沿線に電灯と諸工業用の電力を供給する。さらに木崎から葛塚まで軌道の支線を布設する」という内容である。



して記事を読んだ。発起人に竹内綱の名があり、人数も同数である。まさに諮問案の計画と同一のものであった。

記事の大意は、次のようである。「東京の竹内綱等が東京の資本を

この計画が、いつどのような理由で消えたかは、今のところ不明であるが、明治の末期にこのような計画があったのである。
白新線が新発田・葛塚で開通する四十六年前のことであった。

市史編さん室長 泉田 健助